

(22×26)

あおい目のこねこ

エゴン・マチャーセン作 瀬田貞二訳
福音館書店 1965年(デンマーク 1949)

青い目の元気なこねこがねずみの国を探しに行きます。でも、道を聞いた湖の魚に青い目をばかにされたり、黄色い目のねこたちに意地悪をされたりしてなかなか見つかりません。しかし、困難にあっても「なーに、なんでもないさ」とこねこは楽天的で元気です。ある日、思いがけないことが起こり、こねこはついにねずみの国にたどり着きます。こねこの大きな青い目が表情豊かに描かれています。



(29×23)

あすはたのしいクリスマス

クレメント・ムーア文
トミー・デ・パオラ絵 かなせきひさお訳
ほるぷ出版 1981年(アメリカ 1980)

雪原をトナカイのそりでやってきたサンタクロース。陽気なサンタは煙突から入り、寝静まった子ども部屋のくつ下に贈り物を入れ、ウィंकすると再び空へとび去ります。科学者ムーアがわが子のために書いたこの詩は、百年以上たった今もアメリカで親しまれています。ニューイングランドの丘陵の雪景色や質実な生活の中にもクリスマスを迎える喜びにあふれた室内など、パオラの絵がステキです。この詩は他にも数多くの画家が絵本にしています。



(21×19)

いないいないばあ ㊦

松谷みよ子作 瀬川康男絵
童心社 1967年

赤ちゃんと一緒に楽しむ絵本です。赤ちゃんがよく知っている大好きな『いないいないばあ』が絵本の中で再現され繰り返されています。絵本を楽しみながら自然と「いないいないばあ」の遊びも始まり、赤ちゃんも大人も二重の満足感を味わうことができます。リズムカルな言葉、おさえた色調ながら表情豊かでしっかり赤ちゃんの方を見ている動物たちに親しみもてます。他に『いいおかお』『のせてのせて』など、「松谷みよ子赤ちゃんの本」シリーズがあります。



(31×22)

うさぎのみみはなぜながい

メキシコ民話 北川民次文・絵
福音館書店 1962年

うさぎが神様に、私のちっぽけでみすぼらしい体を森の中で一番大きくしてください、とお願いしました。すると神様は、トラとワニとサルの皮を持ってきたら願いをかなえよう、と答えました。うさぎは持ち前の知恵とすばやい身のこなしで、三枚の皮を手に入れますが…。自分よりはるかに強い相手に対してうさぎがどのようなしたたかな手を使うのか、物語の展開にわくわくします。メキシコ風の力強い絵が話を引き立てています。



(26×21)

うちが いっけん あったとさ

ルース・クラウス文

モーリス・センダック絵 渡辺茂男訳

岩波書店 1978年(アメリカ 1953)

男の子が踊りながら歌います。「うちが いっけん あったとさ ほくだけしってるうちののさ」すてきなベッドにテーブルにドア。さるにスカンク、大男とライオンじいさんも集まった。にわとりごっこにオベラごっこ。歌ってジャンプして「もっとやれ もっとやれ」と大騒ぎ。さてそんな家いったいどこにあるのかな。子どもが思いきりひろげる空想の世界を、リズムカルなことばと動きのある絵で、たっぷり楽しませてくれます。



(31×24)

海へのあさ

ロバート・マックロスキー文・絵

石井桃子訳

岩波書店 1978年(アメリカ 1952)

ある朝、サリーは初めて歯が抜けそうになりびっくりしますが、お母さんに大きくなったしだと教わります。その歯を鳥やアザラシに見せびらかし、お父さんにも見せます。ちょっと大きくなった喜びがサリーの体にあふれています。自然に恵まれた小島で暮らす家族と、近くの港で働く人たちとの日常生活がさりげなく、いきいきと描かれています。紺一色の大判の絵本の中に海辺の生活が広がり、海の空気や匂いや音まで感じられます。



(26×20)

王さまと九人のきょうだい

中国民話

君島久子訳 赤羽末吉絵

岩波書店 1969年

子どものいない老夫婦に一度に九人の子どもが授かります。「ちからもち」「くいしんぼう」などとそれぞれ名付けられた兄弟は、名前のとおり人並みはずれた力を持った若者に成長しました。ある日、王さまの宮殿の柱を「ちからもち」が直すとその力を恐れた王さまは次々と無理な命令を出します。姿かたちがそっくりな兄弟は入れ代わり立ち代わり王さまの前に現れ難題を解決します。次は誰が活躍するか予想しながら読める痛快な話です。



(22×30)

おおかみと七ひきのこやぎ

グリム童話

フェリクス・ホフマン絵 瀬田貞二訳

福音館書店 1967年（スイス 1957）

留守番をしていた子やぎたちは、おおかみにだまされてとうとう戸を開け、つぎつぎにのみこまれてしまいます。助かったのは時計の箱にかくれた末の子やぎだけ…。この有名なグリムの昔話を画家は自分の幼い娘のために絵本にしました。店並みなど画家の身近な風物を取り入れ、緑を効果的に使って印象深く描いています。母さんやぎが、ほっとしてベッドの子やぎたちを見守る最後のおまけのページに父親としての画家の思いが感じられます。



(21×17)

おかあさんだいすき

マージョリー・フラック文・絵 光吉夏弥訳
岩波書店 1954年（アメリカ 1932）

お母さんの誕生日の贈り物に何がいいか、ダニーは、次々出会う動物たちに教えてもらいます。でもどれもうちにあるものばかり。一緒に探しに行く動物はだんだんふえていきますが、森の熊のところへは「わたしは、ごめん」…。一人でいったダニーに熊は何を教えてくださいましたのでしょうか。リズムカルな繰り返しで進められる、単純で構成のしっかりしたお話は、幼い子にもよくわかり、満足できます。絵も明るく、楽しい絵本です。



(30×23)

沖釣り漁師のバート・ダウじいさん

ロバート・マックロスキー作 渡辺茂男訳
ほるぷ出版 1976年（アメリカ 1963）
童話館出版 1995年

バートじいさんは、おしゃべりかもめをしたがえて小さな船で沖釣りにでます。ひっかかったのはくじらのしっぽ。針をやっと取り外すと、かわいいばんそうこうをつけてあげました。そのうちにわかにかん気が悪くなり、くじらのお腹にかけられます、胃ぶくろを突っつき、くしゃみを利用して海にもどると、そこはくじらの大群。列を作り、しっぽにばんそうこうをはってほしいとバートじいさんにせがむのです。ピンク調の絵と、話のテンポが絶妙です。



(26×27)

おしゃべりなたまごやき

寺村輝夫作 長 新太画
福音館書店 1972年

王様は、晩のおかずに目玉焼きを注文します。その日、王様はぎゅうづめの鶏小屋を見て戸を開けてしまい、鶏に追いかけられる始末。お城中で戸を開けた犯人探しが始まります。部屋に戻った王様は、まぎれこんでいた鶏が犯人を知っていることに気がつき、だれにも言わないように念をおします。しかし、晩ごはんに出てきた目玉焼きがおしゃべりをはじめてしまい…。全編ユーモアにあふれ、ストーリーもたっぷり楽しめる絵本です。



(22×21)

おやすみなさい コッコさん ㊦

片山 健作・絵
福音館書店 1982年

おっぱ頭に太いまゆ。一度見たら忘れられない女の子コッコさんが主人公の絵本です。お月さまが「そらのくもねむったよ」「いけのみずもねむったよ」といっても「そらのくもがねむってもコッコはねむらないもん」「コッコはねむらないもん」とがんばり続けるコッコさん。ねむりたくない小さな子どもの気持ちがよく出ていて、お月さまとのやりとりにも思わず笑いを誘われます。他に『コッコさんのおみせ』『コッコさんとかかし』『コッコさんとあめふり』があります。



(21×26)

かあさんのいす

ベラ・B・ウィリアムズ作・絵

佐野洋子訳

あかね書房 1984年(アメリカ 1982)

「わたし」は、かあさんとおばあちゃんの三人暮らし。火事で何もかもなくなってしまいました。いま一番ほしいものは、バラの模様の大きなふかふかのいす。かあさんは仕事から帰ると必ず小銭を大きなビンに入れます。わたしとおばあちゃんも節約して入れます。そしてある日ビンが一杯に！町中さがしてやっと見つけたいすに、一緒に座った三人の笑顔がすてきです。さり気なく語られる家族や周囲の人たちの日常生活。心温まる絵本です。



(31×22)

かえでがおか農場のいちねん

アリス&マーティン・プロベンゼン作

岸田衞子訳

ほるぷ出版 1980年(アメリカ 1978)

「1がつは、ふゆのつき。じめんは、ゆきでまっしろになります」「3がつは、よくかぜのふくつきです」など、各月の農場のくらしが、絵と文章でていねいに描かれていきます。子どもや大人はどんな生活をしているのか、とりや動物や虫たちはどんな様子かなど…。日本とは異なる外国の農場の生活がよくわかります。柔らかく彩色された絵が、人や動物たちの表情を生き生きと伝え、季節の移ろいをよくあらわしています。



(27×19)

かさじそう

瀬田貞二再話 赤羽末吉画
福音館書店 1966年

おおみそか、笠が売れず餅も買えずに、じいさんが町から戻ると、野原に雪をかぶって穴地蔵が並んでいます。見かねて売り物の笠と自分の笠もかぶせ家へ帰ります。ばあさんも地蔵様にあげてよかったと喜び、二人はすっほりめしだけで寝ました。ところが、正月の朝、そり引きの音がして、餅や黄金などをどっさり置いていったのは…。おうぎ形に描かれた彩墨画と、味のある語りが北国のしっとりとした情景をよく表していて心温まる昔話です。



かにむかし

木下順二文 清水 崑絵
岩波書店 1976年

ある日、かにが庭に柿の種をまきました。「はよう芽をだせかきのたね、ださんと、はさみで、ほじりだすぞ」と育てた柿の木はやがて実をつけました。でも、木にのぼれないかには、猿に実を投げつけられてペしゃんこに。つぶれたかにのこうらの下から、子ががが「すぐすぐ」とたくさんはい出し、栗や蜂や牛のふんなど、助っ人たちと一緒に親のあだうちに出かけます。おなじみの昔話を独特の文体と彩墨画が味わい深くしています。



(16×14)

きみなんかだいきらいさ

ジャニス・メイ・ユードリー文
モーリス・センダック絵 小玉知子訳
富山房 1975年(アメリカ 1961)

「ジェームスとぼくはいつもなかよしだったよ」という出だしとともに、肩を組んでいる男の子二人。次の場面では二人は見開きのりはじめでそっぽを向いています。なぜジェームスが嫌いなのかを次々に思い出しているうちに、一緒に遊んだ楽しいことも思い出し…。でもやっぱり嫌いだから、そのことを言いに行こうと勢い込んでジェームスの家に出かけたぼく。さて結末は…。ユーモラスな絵に、男の子の揺れ動く心が見事に描かれています。



(21×26)

きょうはよいてんき

ナニー・ホグロギアン作 芦野あき訳
ほるぷ出版 1976年(アメリカ 1971)

のどがかわいた狐がおばあさんのミルクを飲んで、怒ったおばあさんに尻尾を切りとられてしまいます。尻尾をくっつけてもらうには雌牛にミルクをもらってこなければなりません。雌牛は草をくれたらあげるといいます。つぎつぎとお願いを重ねていき、また戻ってきて、ああよかった、という単純なお話で、アルメニアの民話のもとになっています。本来、言葉の積み重ねを、ゲーム感覚で大勢で楽しむお話なのですが、絵本では、情感のこもった美しい絵が目も楽しませてくれます。

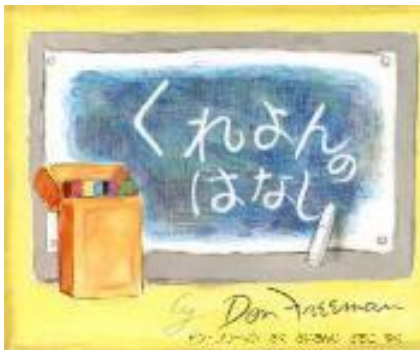


(23×25)

くまのコールテンくん

ドン・フリーマン作 松岡享子訳
偕成社 1975年(アメリカ1968)

ぬいぐるみのくまのコールテンくんはデパートのおもちゃ売り場で、だれかがうちにつれていってくれるのを待っていました。ある日、リサという女の子が気に入ってくれます。でも、リサのお母さんはボタンのとれたコールテンくんを買ってくれません。その夜、コールテンくんはボタンを探しにでかけますが…。翌朝、リサは自分のおこずかいをもってきてくれました。やっと願いのかなった二人の気持ちが、あたたかく伝わってくる絵本です。



(15×18)

くれよんのはなし

ドン・フリーマン作 西園寺祥子訳
ほるぷ出版 1976年(アメリカ1976)

8色のくれよんの入った箱。白い画用紙。「えをかこう!」くれよんたちが次つぎに箱からとび出します。青は海、黄は太陽と島、茶は男の子。絵が出来上がってきます。でも男の子は悲しそう。「家に帰りたいんだ!」そこで黒は船を描き、緑のかめが船まで送ります。男の子のいなくなった島は美しい夕焼けに染まり、かめも眠ります。いかに子どもが思いつきそうな話をそのまま絵にしたような、心の奥深くに語りかけてくる絵本です。



(23×15)

ことばあそびうた

谷川俊太郎詩 瀬川康男絵
福音館書店 1973年

日本語の持つリズム、語感を詩人の谷川俊太郎がたくみに操って、なんとも耳に心地よい新しい唄ができました。

はなののののはな
はなのななあに
なすなののはな
なもないのばな 「のののはな」より

文章は絵文字のようなひらがなで書かれていて、最初は読むのにとまどうかもしれませんが、それも魅力。瀬川康男の個性的な絵も、ことばと響きあっています。他に『ことばあそびうた また』があります。



(23×33)

こねこのぴっち

ハンス・フィッシャー文・絵 石井桃子訳
岩波書店 1987年（スイス 1953）

リゼットおばあさんの家の5匹の子ねこの中で、一番チビのぴっちはいたずら好きの人気者。ある日、他の動物に変身しようとして失敗。池でおぼれかかった上、うさぎ小屋にとじ込められます。その夜、森のけものが小屋を襲いました。黄色に光る目、大きな口！ぴっちは必死で犬のベロに知らせます。でもぴっちは風邪で高い熱を出してしまいました。仲間たちの看病で元気になったぴっちを囲んでのパーティー。動きのある動物の表情が愉快です。『たんじょうび』（福音館書店）の続編です。



(27×19)

三びきのこぶた

イギリス昔話

瀬田貞二訳 山田三郎画

福音館書店 1967年

一番目の子豚はわらで、二番目の子豚は木の枝で家を作りますが、狼に家を吹き飛ばされ、食べられてしまいます。でもれんがで家を作った子豚は大丈夫。狼はこの子豚も食べたくて、あの手この手で誘い出しますが、子豚の方が一枚上手、狼は子豚に食べられます。よく知られた話で、絵本化にあたっては結末が改作されがちですが、ここでは原作を変えず、生きることの厳しさをそのまま伝えた上で、狼はもうこないだねと安心させてくれます。



(26×22)

ジルベルトとかぜ

マリー・ホール・エッツ作 田辺五十鈴訳

富山房 1975年(アメリカ 1963)

メキシコの幼い男の子ジルベルトは、風と一緒に遊びます。風はジルベルトの風船を飛ばし、洗濯物とたわむれ、かさをこわし、りんごを木から落とし、牧場の木戸を動かし、落葉をまき散らし、そして草原でかけっこします。風が引き起こすさまざまな現象と、子どもの反応を描くことによって、目に見えない風をみごとに表現しています。自然はこんなにもすばらしい遊び相手なのだということを思い出させてくれるでしょう。

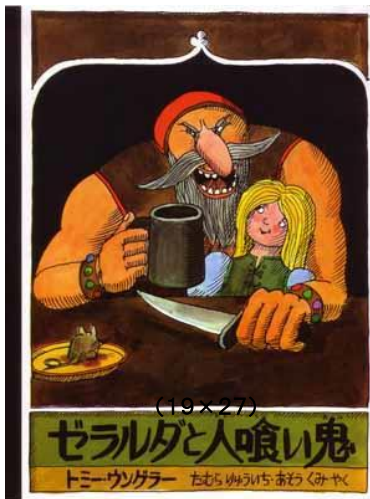


(21×27)

せかい1 おいしいスープ

マーシャ・ブラウン絵 渡辺茂男訳
ペンギン社 1979年(アメリカ 1947)
(2007年7月現在 絶版)

戦争帰りの兵士が三人、おなかを空かせてやってくる、村人たちはあわてて食べ物をおくしてしらん顔。兵士たちは知恵を絞り、村人たちに石のスープを作ることを提案します。石のスープだって?!うまく乗せられた村人たちが協力してできあがったのはどんなスープだったのでしょ。フランスの民話に軽妙な味付けが加えられ、後味のよい上質な笑話になっています。絵にも一作ごとに工夫のあるマーシャ・ブラウンの初期の作品です。



(31×24)

ゼラルダと人喰い鬼

トミー・ウンゲラー作
田村隆一、あそうくみ訳
評論社 1977年(スイス 1970)

おなかをすかせた人喰い鬼は、ある日野菜を売りに行くゼラルダを襲おうとしますが、空腹のあまり崖から落ちて大けが。やさしいゼラルダは看病したり、おいしい料理を作ったりして大奮闘。ゼラルダの作るご馳走を毎日食べているうちに、鬼はすっかり人喰いを忘れ、町は平和をとりもどします。無邪気な女の子に恐ろしい人喰い鬼が改心させられるおかしさ。ユニークな料理の数かず。ユーモアたっぷりの絵と痛快なお話が楽しい絵本です。



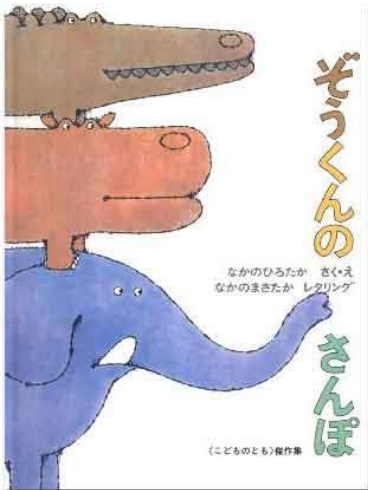
(20×27)

せんとくかあちゃん

さとうわきこ作・絵

福音館書店 1978年

洗濯好きな母ちゃんは、天気の良い日には、洗濯物も子どもも何でもかんでもたらいに放り込んで洗ってしまいます。物干しに干された子どものへそがほしくて、うっかり落ちてしまった雷さままで洗ってしまいました。しわくちゃで目も鼻も口もなくなってしまった雷さまは、かっこいい顔を描いてもらって大喜び。翌朝は雷さまがいっぱい落ちてきて……。たくましい洗濯母ちゃんと画面を埋めつくす雷さまが、ユーモアと迫力にあふれています。



(27×20)

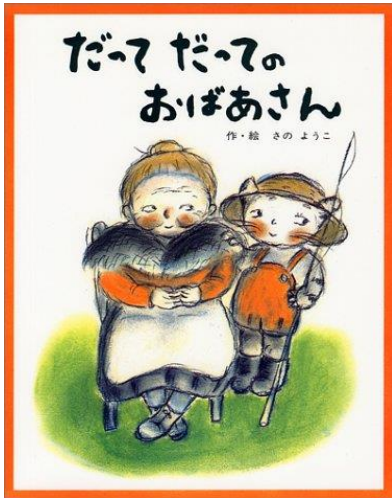
ぞうくんのさんぽ ㊦

なかのひろたか作・絵

なかのまさたか レタリング

福音館書店 1977年

今日はいい天気、散歩に出かけたぞうくんは途中で出会ったかばくを誘います。「せなかにのせてくれるならいいよ」と、かばくが言うと、ぞうくんは「いいともいいとも」と乗せます。次に出会ったわにくも乗せ、かめくも乗せて歩き出しますが、力もちのぞうくんもさすがに重くなってきて…。人のよいぞうくんと、のん気にせなかに乗っている仲間たち。そののどかな雰囲気、ユーモラスで淡い色調の絵とぴったりで。



(27×22)

だっだっのおばあさん

佐野洋子作・絵

フレーベル館 1975年

おばあさんは元気な子猫と一緒に住んでいました。子猫は毎日魚つりに誘いますが、おばあさんは「だっだっ、わたしは98だもの」と言っていることわります。おばあさんの誕生日がきて、子猫はお使いに行きますが、袋が破れてローソクはたった5本になってしまいました。でも、ケーキの上に立てた5本のローソクを吹き消したおばあさんは5さいの気分になって…。おばあさんと子猫の表情がとても楽しい絵本です。



(19×21)

ちいさいしょうぼうじどうしゃ

ロイス・レンスキー文・絵 渡辺茂男訳

福音館書店 1970年(アメリカ 1946)

スモールさんと小さい消防自動車はいつも消防署に待機しています。出動のベルが鳴ると犬のティンカーとともに運転席に飛び乗って現場へ急ぎます。燃えている家の中に取り残された女の子も無事救出。スモールさんのてきぱきした仕事ぶりや、出動から鎮火までの様子が適確に順を追って描かれ、ポンプ車の構造が詳しく説明されています。素朴で暖かみのある絵、サイレンや鐘の音が不思議な親しみを感じさせます。他に『ちいさいきかんしゃ』などスモールさんのシリーズはたくさんあります。



(17×17)

ちいさなさかな ㊦

ディック・ブルーナ文・絵 石井桃子 訳
福音館書店 1964年(オランダ 1962)

ちいさなさかながいつびき、水の中でたべ物をさがしています。水の上では、あひるや白鳥がパンくずをくわえています。女の子がパンをやっているのです。でも、さかなの所までは届きません。そのとき女の子が池に落ちました。さかなはすぐに助け上げ、お礼にもらったパンくずで、まるまる太りました。色・形ともに単純明快な絵と、簡潔でリズムカルな言葉の調和が絶妙で、子どもがはじめて楽しむのに、ふさわしい質の高い絵本です。他に『ふしぎなたまご』『サーカス』などもあります。

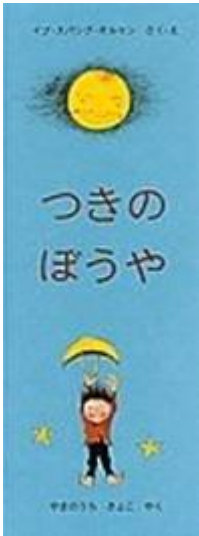


(27×20)

チムとゆうかんなせんちょうさん

エドワード・アーディゾーネー文・絵
瀬田貞二訳
福音館書店 1963年(イギリス 1936)

海のそばにすむ男の子のチムは、船乗りになりたいくてたまりません。ある日、チムはこっそり大きな汽船に乗りこみます。すぐに見つかって船長に怒られますが、甲板を掃除する約束で、乗せてもらうことになりました。しかし航海は順調にはすすみません。ある晩、船は嵐にあい、岩にぶつかって沈没してしまふのです。チムは船長と二人で、船の最後を待つのですが…。冒険小説の持つ楽しさやスリルが、たっぷりつまっている、古典的な絵本です。他に『チムともだちをたすける』などがあります。



(34×13)

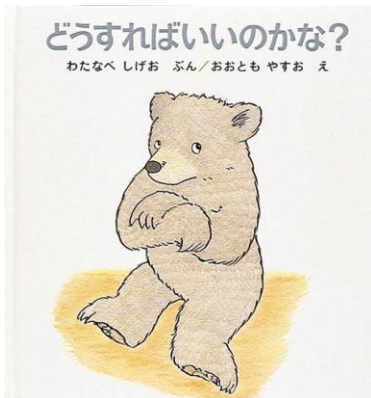
つきのぼうや

イブ・スパンク・オルセン作・絵

やまのうちきよこ訳

福音館書店 1975年(デンマーク 1962)

池の中にもう一つの月をみつけたお月さまに、つれてきてくれと頼まれて、つきのぼうやはかごを片手に出発。星をけとばし雲をつき抜け、細長いページを上から下へとかけおりにいきます。凧、風船、ボールと次々に丸い形に出会いますが、ぼうやはもう一つの月を求めて、もっと下へ下へと…。明るいブルーの地に、黄色い月と楽しい表情のつきのぼうやの表紙と、ひときわ目立つ形。子どもたちが、思わず手を出してしまう魅力を持っています。



(22×21)

どうすればいいのかな ㊦

渡辺茂男文 大友康夫絵

福音館書店 1977年

「シャツをはいたらどうなる?」ひとりで、シャツにとりくむ、くまくん。「どうすればいいのかな?」「そうそう、シャツはきるもの」くまくんは上手にできました。同じようにパンツ、ぼうし、くつ、と言葉のやりとりを楽しみながら、身支度がちゃんと整います。砂場へ出かける、くまくんの得意そうな顔…。自分で着たり、履いたりを始めた幼い子にぴったりの絵本です。絵は色鉛筆彩色のシンプルなもの。くまくんの絵本は他に『おとうさんあそぼう』などがあります。



(28×20)

どうながのフレッツェル

マーグレット・レイ文 H・A・レイ絵
渡辺茂男訳
福音館書店 1978年(アメリカ 1944)

フレッツェルは、世界一胴長のダックスフントです。ドッグショーで優勝して、大好きなグレタに結婚を申し込んだのに、胴長なんて大嫌いと言われます。ところが、その長い胴のおかげで、深い穴に落ちたグレタを助けることが出来ました。そして、めでたく結婚します。二匹の犬が、表情豊かに愛らしく描かれています。ひとまねこざるシリーズのレイ夫妻が、フレッツェルの成長をユーモアたっぷりに暖かく描いています。



(22×29)

どうぶつ

ブライアン・ワイルド・スミス文・絵
渡辺茂男訳
らくだ出版 1969年(アメリカ 1964)

独特の鮮やかな色彩で、ページいっぱいに描かれた生命力にあふれた動物が、次々に登場します。表紙には、眼をらんと輝かせたトラ、見開きには、足をふんばって向かい合う「サイのしょうとつ」、そして大きなあくびの「カバのかぞく」と続きます。今にも動き出しそうな絵から、作者の「ほら見てごらん、こんなに美しい生き物たちがいるんだよ！」というメッセージが伝わってきます。ごく小さい子どもの絵本としてもおすすめです。他に『とり』『さかな』があります。



(22×15)

どろんここぶた

アーノルド・ローベル作 岸田裕子訳
文化出版局 1971年(アメリカ 1969)

やわらかいどろんこの中に、すすすーっと沈みこむのが、なによりも好きなこぶたがいました。ある日、きれいすきなおばさんが、お気に入りのどろんこまで掃除してしまいます。怒ったこぶたは家を出て、どろんこを探しに行きます。町まできて、やっとみつけたどろんこは…。どろんこに沈みこむ、こぶたの満足げな表情。きれいにしなさいと、いつもやかましくいわれている子どもだけでなく、大人にまで、郷愁に似たやすらぎを与えてくれます。

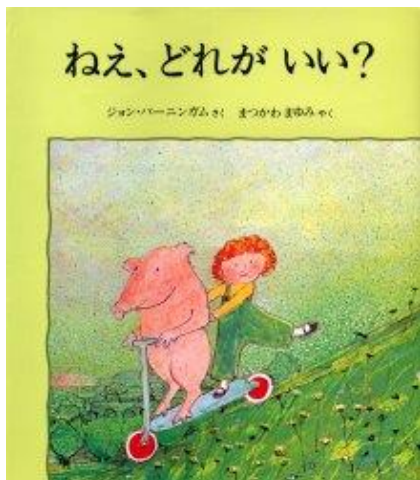


(28×22)

長くつをはいたねこ

ハンス・フィッシャー文・絵 矢川澄子訳
福音館書店 1980年(スイス 1966)

粉屋の末息子が、亡くなった父親から受けついで遺産はいっぴきの猫だけ。でも、その猫はただものではありませんでした。うさぎやウズラを森でとってきて、主人からの贈りものだといって王様に献上し、一文なしの若者を、カラバ侯爵にしたてあげてしまうのです。有名なペローの話をもとにしてはいますが、随所にフィッシャーの遊び心をのぞかせた愉快なページを設けていて、一見無造作ながら巧みな絵とともに、楽しい絵本になっています。



(31×27)

ねえ、どれがいい？

ジョン・バーニンガム作 まつかわまゆみ訳
評論社 1983年 (イギリス 1978)

「もしもだよ。きみんちのまわりがかわるとしたら、大水と、大雪と、ジャングルと、ねえ、どれがいい？」というような問いかけが次から次へと続きます。くものシチューやへびのジュースが出てきたりして質問の内容はどんどんエスカレートし、子どもたちは大喜び。問いかけにとまどったり喜んだりしながら答えを選んでいき、最後には十分遊んだという満足感が得られます。子どもから大人までみんな賑やかに楽しめる絵本です。



(37×27)

ねこのオーランドー

キャスリン・ヘイル作・画 脇 明子訳
福音館書店 1982年 (アメリカ 1938)
(2007年7月現在 絶版)

ねこのオーランドーと奥さんのグレイスと三匹の子ねこは、飼主に休暇をもらって車でキャンプに出かけます。キャンプ場の大きな画面の端の方に去っていく夕立と、一方の端に雨上がりの虹。雄大な自然の中で虹を追いかける子ねこたちを見守るオーランドー夫妻。その場面を平面の地図と見くらべるたのしさも、用意されています。水遊びや山登りなどオーランドーは父親として家族を十分楽しませます。特大絵本の中でママレード色のオーランドーは迫力満点です。他に『ねこのオーランドー農場をかう』などがあります。



(31×22)

ねむりひめ

グリム童話

フェリクス・ホフマン 絵 瀬田貞二 訳

福音館書店 1963年（スイス 1959）

15才になった姫は、つむに刺されて予言どおり百年の眠りにつきます。そのとたん、城じゅうの人も動物も火も、なにもかも、そのまんまの姿で眠ってしまいます。耳で聞く素朴な昔話を、読む昔話としてグリムが細かく描写したことで知られる場面ですが、ホフマンがさらに、見る昔話として、すてきな絵本にしました。百年目にあらわれた王子との盛大な結婚式と大きなケーキも見ものです。たしかなデッサンと落ち着いた色づかいが魅力的。



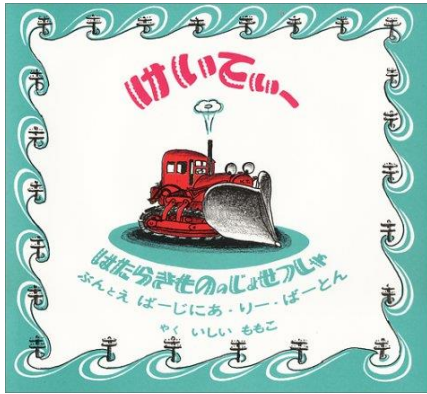
(20×27)

はじめてのおつかい

筒井頼子 作 林 明子 絵

福音館書店 1976年

ママに、牛乳を買ってきて、と頼まれた5才のみいちゃん。ひとりでおつかいに行くのは初めてです。しっかり握りしめた百円玉を転んだ拍子に落としたり、お店に着いても大人のように大きな声で「ください！」と言えなかつたりしますが、一生懸命に赤ちゃんのために牛乳を買ってきます。みいちゃんが歩いていく住宅地の絵の中に、道ばたの掲示板で探している猫や、かごから逃げ出した小鳥などをさがす楽しみも隠されています。



(23×26)

はたらきもののじょせつしゃ

けいていー

バージニア・リー・バートン文・絵

石井桃子訳

福音館書店 1978年(アメリカ 1943)

「けいていー」は、キャタピラ付きの立派なトラクター。夏はブルドーザー、冬は除雪車としてシェオボリスの町で働いていました。ある年の冬、大雪が降り、町はすっぽりと雪につつまれて何もかも動けなくなった時、「けいていー」だけがただ一人雪をかきわけて働いていました。白い雪の中に「けいていー」の通ったあとにだけ、一すじの道ができてゆきます。雪の多い地方はもちろん、雪の少ない地方の子も「けいていー」が大好きになること受け合いです。



(29×21)

はちうえぼくにまかせて

ジーン・シオン作

マーガレット・プロイ・グレアム絵

もりひさし訳

ペンギン社 1981年(アメリカ 1959)

夏休みに旅行に行けないトミーは、近所の人たちから鉢植えをあずかるアルバイトを始めます。その数は、どんどん増えて家中を占領し、その上、ぐんぐん大きくなってゆきます。トミーは鉢植えに囲まれた生活を面白がりませんが、お父さんはごきげんななめ…。日本の子どもとは少し違った夏休みを過ごすトミーの行動力が魅力的です。青と緑を基調とした、画面からあふれるほどの植物と単純な線描きのトミーの表情が生き生きとしています。



(31×24)

ふしぎな500のぼうし

ドクター・スース作・絵 渡辺茂男訳
偕成社 1981年(アメリカ 1938)

王様の前でパーソロミューは帽子を脱ぎました。ところが脱いでも脱いでもいつの間にか新しい帽子が頭の上に現れます。王様はカンカンに怒り、パーソロミューは塔の上から突き落とされることになりました。必死に帽子を脱ぎながら階段を上がっていくと、帽子の形が変わり始めます。これでもか、これでもかと出てくるふしぎな帽子。そして500番目に現れたみごとな帽子を見て王様は……。思わず「ヤッター」と叫びたくなるラストです。



(18×18)

ぶたたぬききつねねこ

馬場のぼる
こぐま社 1978年

漫画家でもある作者のおおらかでユーモラスな、絵がいっぱいのしりとり絵本です。おひさま、まど、どあ……ぶた、たぬき、きつね、ねこ……しろくま、まく、くりすます、と最後のクリスマス場面にたくみに導かれていきます。一貫したストーリーはありませんが、絵からお話を読み取ることができ、単に言葉の羅列に終わっていません。「次はなにがでてくるかな？」とページをめくる楽しみがある言葉遊び絵本です。他に『ぶたたぬききつねねこ その2』があります。



(26×24)

ふゆめがっしょうだん

富成忠夫、茂木 透写真 長 新太文
福音館書店 1986年

冬の間、木の芽たちは枝の先でやがてくる春を待ち、じっと寒さにたえています。そんな木の芽たちは、なんと人の顔そっくり。さまざまな楽しい「顔」が大写しの写真で次々と登場します。そして写真にそえられた、楽しくリズムカルな春を迎える詩。本当に木の芽たちが、合唱しているかのようです。ユニークな木の芽たちの「顔」と、それにぴったりあった詩。この二つによって、冬の自然の新しい楽しさを発見する科学絵本です。



(22×28)

ペニーさん

マリー・ホール・エッツ作・絵 松岡享子訳
徳間書店 1997年（アメリカ 1935）

ペニーさんは、びんぼうなお年寄り。おおぜいの動物たちと、家族のようにくらしています。ペニーさんが町工場に働きにでているあいだに、動物たちは勝手に、となりの畑の作物を食べてしまいました。それを見つけたおとなりさんは、弁償がわりに膨大な仕事を要求します。むろんペニーさんだけではこなせません。動物たちは協力して、夜中にこっそりと働きます。黒白を基調とした、大らかな表情の絵。ペニーさんと動物たちの交流が、心に残るエッツのデビュー作です。他に『ペニーさんと動物家族』があります。



(28×21)

へびのクリクター

トミー・ウンゲラー作 中野完二訳
文化出版局 1974年(アメリカ 1968)

フランスの小さな町に住むポト婦人は、息子から誕生日にへびをいっぴきプレゼントされました。名前はクリクター。セーターを編んでやったり、長いベッドも用意してやり、本当の子どものようにかわいらします。学校にも行き、子どもたちと遊ぶクリクターは、頭のよい親切なへびに育ちました。ある日、ポトさんの家にとろほうが入ります。さあ、その時クリクターは？ ウンゲラーらしい奇抜な着想と、しゃれたタッチの絵が魅力的です。



(25×32)

ペレのあたらしいふく

エルサ・ベスコフ作・絵 小野寺百合子訳
福音館書店 1976年(スウェーデン 1929)

ペレは自分だけの羊をいっぴき持っています。ペレが大きくなるにつれ、羊の毛も長くなりましたが、ペレの上着は短くなりました。そこで羊の毛を全部かりとり、おばあさんにすいてもらい、糸につむいでもらいます。そのお返しに、ペレは様々な仕事をします。村のみんなに協力してもらったペレは、最後に青い服を手にいれ、「あたらしいふくをありがとう！」と羊に言いました。美しい自然を描いた絵が、素朴な魅力を感じさせる絵本です。



(23×25)

まっくろネリノ

ヘルガ・ガルラー作 矢川澄子訳
偕成社 1973年（オーストリア 1968）

まっ黒な鳥のネリノは、きれいな色の父さんと母さん、四人の兄さんたちと暮らしています。兄さんたちはまっ黒はだめだと言って遊んでくれないので、ネリノはいつも一人ぼっちです。ある日、急に行方不明になった兄さんたちを、まっ黒ネリノが夜の闇にまぎれて助け出しました。まっ黒でもいいところがあることをやっとわかってもらえ、兄弟は仲良くなりました。外見にとらわれず、大切なものは何かということを語ってくれる絵本です。



(25×22)

みんなうんち

五味太郎作
福音館書店 1977年

「うんち」ときけば、子どもは興味しんしん。そのうんちが、主役の絵本です。ごはんを食べると、うんちがでます。人もねずみも、くじらだってうんちをします。うんちは動物の大きさや種類などで、形や色やにおいが違うことが、よくわかります。カラフルなページの中で、気持ちよさそうにうんちをしている動物たち。うんちをするのは当たり前のことですが、動物も人間も、みんな同じように「生きているんだ！」というメッセージが伝わってきます。

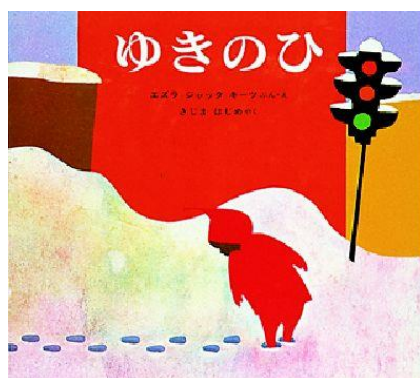


(17×17)

もうふ ⑧

ジョン・バーニンガム作 谷川俊太郎訳
富山房 1976年(イギリス 1975)

いつもの毛布がないと寝られない、小さな男の子。ある晩、毛布が見えなくなりました。さあ大変！お父さんもお母さんもいっしょに、あちこち家じゅうを探しまわりますが、みつかりません。やっと男の子が自分で枕の下にあった毛布をみつけ、安心して眠ることができました。どこの家でも起こりそうな、子どもの暮らしのひとこまで、身に覚えのある子も多いはず。そんな子を、さり気なく支えている家族のあたたかさが感じられます。他に『あかちゃん』『がっこう』など「バーニンガムのちいさなえほん」シリーズがあります。



(23×25)

ゆきのひ

エズラ・ジャック・キーツ文・絵 木島 始訳
偕成社 1969年(アメリカ 1962)

小さな男の子のピーターは、町に雪が降り積もった朝、一人で雪の中へ遊びに行きます。足あとをいろいろな形につけてみたり、木の上の雪を落したり、雪だるまを作ったり、雪山に登っては滑り降りたり、次々に新しい遊びを考えつきます。家に帰ってからも、何回も思い出すほど楽しい経験でした。次の朝、こんどは友だちを誘って出かけます。子どもらしい世界を描き出すのに、色鮮やかで、形の明快なカラーユグが効いています。

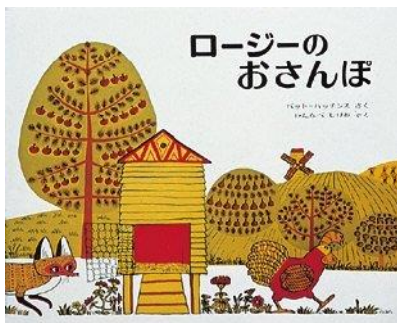


(26×19)

よかったねネットくん

レミ・チャーリップ文・絵 八木田宣子訳
偕成社 1969年（アメリカ 1969）

ネットくんが、びっくりパーティーによばれます。でも、パーティーは遠い田舎でやるんだって。よかった！友達が飛行機を貸してくれて。でも、たいへん！飛行機が爆発。よかった！パラシュートがあって。でも、たいへん！パラシュートには穴が…。つぎつぎと、たいへん！よかった！をくりかえして、行き着いたところは…。色彩と黒白ページが交互に配置された絵も効果的で、スリルと安堵のリズムを楽しみながら大満足で終わります。



(21×26)

ロージーのおさんぽ

パット・ハッチンス作 渡辺茂男訳
偕成社 1975年（アメリカ 1968）

めんどりのロージーが、散歩に出かけました。それを見つけたきつねが、襲いかかろうとします。ところが、つかまえようとする度に、あと一歩のところでタイミングが合わず、池に落ちたり、干草の山に埋もれたり。マイペースで散歩を続けるロージーのすました表情と、どじなきつねのまぬけぶりには、思わず笑ってしまいます。ページをめくるだけでストーリーが伝わり、黄色を基調にした鮮やかでデザイン的な絵がたのしい絵本です。